

陣内秀信

建築史家・
元都市史学会会長

地方創生を押し進める テリトリー肖像の魅力

「世」界広しといえど、吉田初三郎が描き続けた作品群ほど、人々の心を惹きつける鳥瞰図というものを私は知らない。俯瞰した視点を自由に移動し自在に定められるダイナミックな構図の面白さに圧倒され、横長画面全体にぎっしり描き込まれた要素の多ささに目を奪われる。なかでも日本の国土が誇る自然景観の多様さ、すなわち山々と谷、川、湖、平野、そして複雑な海岸線が織りなす地形のナラティブな表現が「初三郎式鳥瞰図」の真骨頂だ。その土地の条件にそって人々の営みが生んだ、点在する都市や集落、寺社、名所、温泉など、さらには近代が創り出した新たな要素とその相互の関係性を、初三郎は広域圏のパノラミックな風景として見事に描き上げる。興味深いのは時代的な背景だ。一連の鳥瞰図が描かれた大正中期から昭和初期は、一方で、江戸時代以降の日本の産業化、近代化が大きく開花した時代当たり、鉄道網が張り巡らされ、全国各地で近代の行楽地や文化施設、工場、発電所などの産業施設が続々と登場した頃に当たる。その新旧が混ざったこの活気ある時代の都市とその後背地に広がる田園の姿をリアルに読み取れるのが、実に楽しい。

初三郎が示した連携する都市群と背後に広がる田園も山も海も包含して捉える眼差しは、まさにイタリア語の「テリトリーオ」地域、領域」という言葉と合意通ずる。高度成長期以後、都市化＝工業化ばかりを追求し、田園、農村との繋がりを失った日本の都市にとって、吉田初三郎の鳥瞰図から読み取れる魅力的な「テリトリー肖像」は、地方創生を本格的に押し進める上で重要な出発点となるに違いない。

推薦します (五十音順)

本書の特徴

- 吉田初三郎による鳥瞰図四〇〇点余を、「広域鳥瞰図」「市町村鳥瞰図」「主題別鳥瞰図」の全三期に分けて集成する決定版。各配本は、「図版篇」「解説篇」の二冊とし、「全国」「北海道」「東北」「関東」「北陸・甲信越」「東海」「関西」「中国」「四国」「九州」「外地(朝鮮・台湾・満州・樺太)」をそれぞれ単立する。
- 「図版篇」は、「A3横判」の見開きで可能な限り大きく忠実に鳥瞰図を掲載。状態の良い原本を使用し、その多くについて新たに高精細スキャンを実施。アート紙印刷により、鳥瞰図の魅力を最良の形で味わうことができる。鳥瞰図に記載される地名についても判読可能である。
- 「解説篇」では、図版篇に掲載した全鳥瞰図について、当該地方に通暁した各地の研究者・美術館学芸員などによる個別解説を付した。また各鳥瞰図の原画ほか、肉筆の鳥瞰図についても四〇〇点以上を掲載した。
- 「解説篇」では、図版篇に収録した鳥瞰図の異版や類似の鳥瞰図を多数掲載。また鳥瞰図の構図タイプの分類を施し、膨大な初三郎鳥瞰図について一定の類型化を試みた。
- 「解説篇」の末尾には、図版篇に掲載した鳥瞰図の裏面についてもすべて掲載。当時の各地方の情報を集積し、地方史研究の宝庫として有用である。

本書をおすすめします

- ❖ 近代史・地理学・美術史学などの研究者、人文学系の大学図書館
- ❖ 観光政策・地方自治などの研究者、法政系や観光系の大学図書館
- ❖ 建築史・都市史の研究者、理工学系の大学図書館
- ❖ 経済史・鉄道史などの研究者、経済学系の大学図書館
- ❖ 県立図書館、市町村立図書館、教育委員会
- ❖ 美術館、博物館、資料館
- ❖ 郷土史家、地図愛好家 など

編者略歴

堀田典裕 ほった よひひこ
一九六七年、三重県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科准教授。一九九五年、名古屋大学大学院工学研究科博士課程後期修了、博士(工学)。日本学術振興会特別研究員、デルフト工科大学建築学部研究員、名古屋芸術大学非常勤講師などを経て現職。

主な著書に、「初三郎」の鳥瞰図を読む―描かれた近代日本の風景(全国学校図書館協議会選定図書)、『自動車と建築』(平成二十三年度日本都市計画学会石川奨励賞および第三十三回国際交通安全学会賞)、『山形都市』黒谷(太郎)の思想とその展開(第十八回建築史学会賞)など。主作品に、『又務県市合併式墓地』(豊中のクリニック「展覧会」A10W: Architecture for Last One Mile)がある。

『吉田初三郎 日本全国鳥瞰図集成』全3期 堀田典裕 [編]

- 各配本とも全2巻
- 図版篇 A3横判変型(297×375mm)・アート紙(サテン金蔭)印刷/上製・豪華クロス装/各巻140～160頁
- 解説篇 A4横判・B7トラネクスト印刷/上製・豪華クロス装/各巻600～800頁

- 配本予定
- I 広域鳥瞰図 ISBN 978-4-336-07569-7 [第一回配本] 定価: 本体83000円+税 2026年2月刊行
- II 市町村鳥瞰図 ISBN 978-4-336-07572-7 [第二回配本] 予価: 本体83000円+税 2027年6月刊行予定
- III 主題別鳥瞰図 ISBN 978-4-336-07575-8 [第三回配本] 予価: 本体83000円+税 2028年10月刊行予定

特別協力＝八戸クリニック街かどミュージアム
推薦 (五十音順)＝荒俣宏 (作家・博物学研究者)、木下直之 (美術史家・東京大学名誉教授)、陣内秀信 (建築史家・元都市史学会会長)、山口晃 (画家)

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL: 03-5970-7421 FAX: 03-5970-7427
https://www.kokusho.co.jp E-mail: info@kokusho.co.jp

取り扱い店

申込書

ご記入後、お近くの書店へお持ち下さい

『吉田初三郎 日本全国鳥瞰図集成』全3期を____セット定期注文します

『吉田初三郎 日本全国鳥瞰図集成 I 広域鳥瞰図』を____冊注文します

お名前

ご住所

お電話

堀田典裕 [編]

吉田初三郎

日本全国鳥瞰図集成

全3期

● 第1回配本 (広域鳥瞰図) 収録図「青梅鉄道沿線名所図絵」(表題同) 大正12年(1923)

「大正広重」吉田初三郎が
残した美麗な鳥瞰図
四〇〇点余を大判掲載する
決定版集成本、
ついに刊行なる！

荒俣宏 作家・
博物学研究者

鳥瞰図を越えた マルチ図像だ！

初三郎の鳥瞰図といえば神田神保町を思いだす。昭和四十年ごろには古書店の軒下、平台などに、「初三郎」と記された観音開きの一枚もの観光絵地図が山のように積んであった。これが減法おもしろい。だって、絵地図なのに情報満載、どの地域の図にも、ハワイや樺太、香港といった信じがたい遠方までが図示され、しかも異様なまでに自然に収まっているのだ。いくら買っても、果てがないことも驚きだった。やがて初三郎の真の価値も実感した。自分が戦前の水族館の行方を探したころは、資料が皆無だった。しかし大連の「星ヶ浦水族館」という謎の施設が、初三郎の地図に出ていたのだ！ 日本が開発したこの観光地と水族館の資料が、ついに発見できた。有名な大和ホテルの下、海岸に、その正面や構造まではっきりとだ。以来、初三郎は我が秘密資料でもある。「三五」次元の超望遠鏡鳥瞰図」と呼ぶしかない。昭和天皇が皇太子時代に修学旅行で初三郎を知り、あまりのおもしろさに歓喜したのは当然だ。遅すぎた復活を祝す。

木下直之 美術史家・
東京大学名誉教授

驚きと説得力に満ちた 初三郎鳥瞰図の徹底した集成

鳥瞰図という呼び名には、鳥になつて下界を眺めたいという人間の昔からの希望が込められている。今なら飛行機の窓越しに、ドローンの映像に、宇宙衛星の画像に、いくらでも地上の風景を眺めることができる。しかし、吉田初三郎から送られてくる風景は、そのどれもと異なっている。初三郎の絵図を目にしたところで、鳥になつてのんびりと空に浮かんでいる気分にはなれない。風景の向こう側のふだんは見えないものがつぎつぎと目に入ってくるからだ。もちろん、そこには観光地や鉄道網や日本列島がわかりやすく示されるのだが、観光や国土や日本や外地という観念、文化、そこでの人間の暮らし、さらには災害や戦争といった出来事までもが見える。

それを表現するために、初三郎は空間を自由自在にゆがめる。それは目を心地よく驚かせ、大胆に変形してなお説得力を持つ。初三郎の絵図を見る醍醐味だ。初三郎はしばしば「大正の広重」と呼ばれるが、構想力と独創性においては、むしろ北斎に匹敵するのではない。

一六〇〇点を優に超えるという初三郎の絵図には、当たり前だが注文者がいた。それは鉄道省であり、地方公共団体であり、鉄道会社や観光業者であり、制作依頼にはそれぞれの思惑があった。初三郎が好きに描いたわけではない。したがって、鳥瞰図の裏面情報まで含めるとこのたびの徹底した『集成』は、初三郎の造形表現を楽しむ画集にとどまらず、絵図の向こう側にあるものを明らかにしてくれるだろう。

山口晃 画家

名所をめぐる壮大な 入れ子構造のパノラマ

まだ学生の頃だったか、自作の街の絵を見せた方から初三郎の名を初めて聞いた。彼の絵が持つ特異な空間性を示唆され後日見てもと、なるほど名所図遠景の水平線にさりげなくニューヨークなどと吹き出しが付されており、これは珍だと思ったものだ。自分でも都市鳥瞰図を描くようになってから得た知見で彼の絵を見直してみると、実に様々な創意工夫に気付かされる。自在な空間の歪め方ばかりもとより、投影図と透視図のシームレスな繋ぎ方とか、レンズ的な部分拡大のズーム感、航路・路線・吹き出しなどが見事に絵面化され図と絵が渾然一体になった様とか、地平線に向かって近景中景遠景の景色が逆に拡大してゆく仏画の如き構成のものもあり、見どころが尽きない。伝統的な青緑山水を、繋ぎの藤色によって近代的な色彩と両立させた山々の描写は、初三郎作品を下支えする大きな魅力だろう。

近世と近代、東洋と西洋、商業美術と純粋美術がギシギシとぶつかりながら、具体的に練り上げられてゆくダイナミックな絵の中心には、単に概念を指し示す地名などの文字が書かれた名札があるのみだ。ある意味身も蓋も無い中心の虚空、だがそれこそが、記憶の依代として強烈に作用する。

名所を記憶の集積として鳥瞰した初三郎とその作品自体をも「名所」として、彼の扱った名所ごと鳥瞰しようというのが本書である。壮大な入れ子構造がどのような大循環パノラマを見せてくれるのか大いに期待するところだ。

まで追慕し來りしも既に
那島にて歿せしと聞き
驚哭殆が寸息を胸中に投